



照葉樹林文化論の背景とその展開（１）

田畑，久夫

(Citation)

兵庫地理, 36:22-35

(Issue Date)

1991-03

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002372>



照葉樹林文化論の背景とその展開 (1)

田 畑 久 夫

1. 問題の所在

「ある民族 Volk の間に、そのせまい郷土の地域の限界を越えて、人間が活動している舞台についての一般的な性格を学び、かつその本質をとらえようとする要望が純粹の知識欲からわきあがるとき、それは高い精神的高揚のしるしであるとみなしてさしつかえない。」とは、von Richthofen, F.F. が、今から約100年ほど前にあたる1883年に、Leipzig 大学地理学教授として就任するときに行なった就任講演の冒頭の一節である。¹⁾ここで述べられている名言は、とりわけ、若い学徒、研究者に対する地理学研究の指針とでもいうべきものである。本稿で以下に論を展開する照葉樹林文化論と称されている作業仮説 (working hypothesis) も、対象こそ異なれ、同様の高い精神的高揚の賜物であり、新たなる学問的地平を拓くものといえよう。すなわち、照葉樹林文化論と呼ばれている文化論は、わが国固有の基層文化 (Basic Culture) を考察する場合、1つの有力な手段とみなされるのである。

とはいうものの、前述の如く、現段階では、あくまで非常に魅力ある作業仮説としての段階に留まっている恨みがある。その理由の第1は、かつて言及²⁾したように、照葉樹林帯の中心部³⁾において、最近では若干改善されつつあるが、詳細なフィールドサーヴェイがほとんどなされてこなかった結果である、と推定できる。⁴⁾これは、中心部に該当する地域が、ブータンなどのように再度鎖国状態になったり、あるいは中華人民共和国のように、外国人の立ち入りが原則として禁止されている、いわゆる「未開放地区」であったりしているからである。すなわち、これらの地域では、フィールドサーヴェイが実質上不可能であるか、実施したとしても種々の制約があるという特殊な事情と深く関連している。第2点として指摘できるのは照葉樹林文化論の基本概念自体が、時間とともに微妙に変化しているという事実である。それ故、照葉樹林文化論の全体像の把握が非常に困難になっ

ている。

本稿では、第1の問題点すなわち照葉樹林帯の中心部におけるフィールドサーヴェイに関する点は、今後の調査の成果を期待することにし、第2点すなわち照葉樹林文化論の基本概念の時間的な推移に的をしぼり、論を展開していくことにする。その場合、より鮮明に照葉樹林文化論を把握するために、とくに照葉樹林文化論が形成された背景に注目したい。かような作業を踏まえることにより、わが国の基層文化解明の有力な手段の1つになりうることを、明らかにしようとするものである。

2. 照葉樹林文化論成立の背景

照葉樹林文化論は、後章で詳細に論じることになるが、結局のところ、わが国固有の基盤あるいは根底となっている基層文化の多くが、いわゆる照葉樹林帯に発祥した農耕文化⁵⁾ (farming culture) と共通の基盤を有しているとみなす点である。すなわち、例えば、茶の葉を加工して飲用する習慣、モチを食べる風習、麴^{こうじ}を使用した発酵酒の醸造などに代表される、照葉樹林帯に成立した独自の農耕文化に付随した文化要素は、照葉樹林帯の中心部から、はるか遠方の極東の離島の位置する日本列島西部に伝播してきたものであるという作業仮説である。

この仮説でとくに注目されるのは、まず第1に、照葉樹林帯に固有の農耕文化——より厳密には農耕文化複合の形態をとるのであるが——が確認できることである。つまり、かような観点は、文化の基本的かつ経済的基盤とでも称すべき農耕、およびそれを基礎にして成立した農耕文化は、世界の各地域において斉一的に発祥したものではなくて、最初に特定の発祥の中心地が存在し、その後、何らかの方法で、他の諸地域に伝播したと想定する立場である。第2としては、とりわけわが国の基層文化との関連においてであるが、後代の日本文化の形成には非常に強力な衝撃 (impact) を

与えた説であるとみなされることである。

前者に関しては、照葉樹林文化論の第1提唱者である中尾佐助が、Murdock, G. P.⁶⁾ とならんで影響をもっとも強く受けたと推定される、アメリカの著名な文化地理学者 Sauer, C. O.⁷⁾ をとりあげ、論じていくことにする。後者については、第2次世界大戦後における日本民族文化の起源をめぐる諸問題の端緒を切り拓いたともいえる、民族学者岡正雄の主張する「日本文化の基礎構造」をとりあげる。⁸⁾ というのは、岡正雄の学説の特色が、実証的分析を主体にしたものではないけれども、初めに理論的なフレームワークを設定し、それを根拠にしつつ、日本の民族文化を周辺の諸民族のそれと比較し、そこに主として年代的な関係を発見し、わが国における種族文化の重層関係を抽出しようとする点に求められるからである。すなわち、照葉樹林文化論も、照葉樹林地帯という地域設定をし、そこに成立した文化が種々の段階を経由して——後述のように、それは農耕方法の発展に対応するものであるが——、日本の基層文化の形成に大変寄与するものであるとみなしている事実から、岡正雄の見解とは非常に関係が深いものといわざるをえない。それ故、照葉樹林文化論に関する第1提唱者である中尾佐助には言及していない⁹⁾ が、後者の代表者として、岡正雄の学説をとりあげることにする。

1) Sauer, C. O. の「農業起源論」

前項で論じたように、照葉樹林文化論の第1提唱者は中尾佐助である。すなわち中尾は、照葉樹林文化論の生態学的基盤になっている照葉樹林地帯という概念を主張した。そして、かかる概念を想定する際に、例えば照葉樹林文化論の端緒とでもいべき論文¹⁰⁾ においても、Sauer, C. O. の唱える「農業起源論」に多くの理論的根拠を依存したのである。さらに、その後の照葉樹林文化論の展開に関しては、佐々木高明の研究業績¹¹⁾ を見逃すことができない。しかし、佐々木は、Sauer, C. O. とほぼ同じ専門分野を専攻する研究者であり、それ故、佐々木の立論の根拠にも、Sauer, C. O. の影響が非常に大であると推定できる。

Sauer, C. O. は、その著書において「地理学者の取り扱う事柄」というものは、絶えず、際限なく変化しつづけているものである。またそれらの事柄は、れっきとした理由があって、どこにでも起

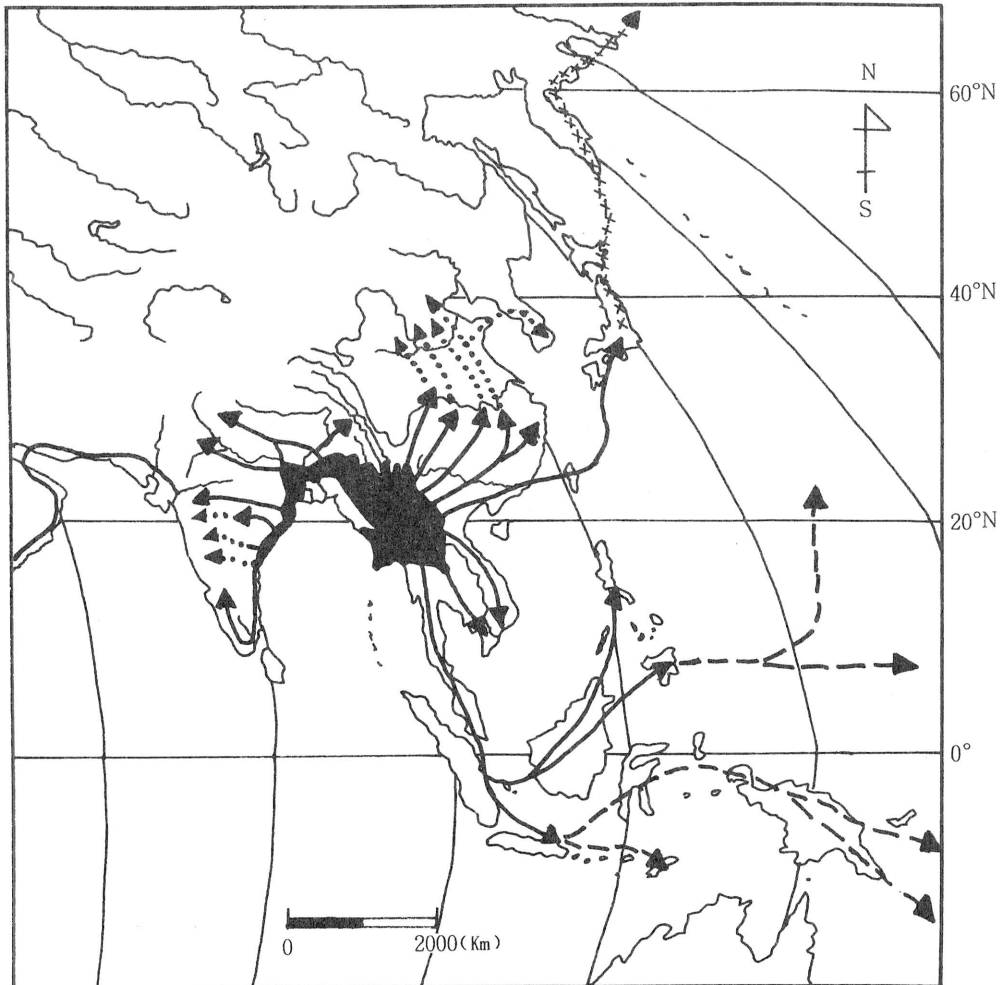
こるというものではなく、どこかある一定の場所、すなわちある条件をそなえた現実的な場所に起こるものである。われわれの取り扱う事象は、概念的に考えられる一定の型にしたがって、規則的に周期的に継起するものではけっしてない。¹²⁾ と論じ、自身の基本的な立場を表明している。¹³⁾ すなわち、Sauer, C. O. の見解の核心は、引用文の後半にみられるように、地理学が対象とする事象は、一定の型に従って、規則的あるいは周期的に継起するものではないと主張している点である。かかる点は、従来の植物生態学者および人類生態学者の立論の中心概念であった並行再起 (parallel recurrence) の立場¹⁴⁾ —— 当時それが「進化論者の」と称されていたのであるが —— に反対することを意味した。つまり、Sauer, C. O. は、進化のプロセスにおいて、いつかは以前の状態に再度戻ったり、あるいはくり返し同じ事象が起こるのではなくて、実際に「進化」というものは、不断の変化と分化にとつてのみ行なわれるものであると唱え、「進化」の累積的分化 (accumulating divergences) を主張したのである。¹⁵⁾

かような立場から、Sauer, C. O. は、農業がある限定された特定の地域に発祥し、そこから世界各地に伝播していったとみなするのである。そして、特定の地域が選定される条件として、次の項目が基礎的前提になるとした。¹⁶⁾

- ① 農業は、快適に余暇をもって生活している人々の間から開始された。
- ② 農業の起源地は、多種多様の動植物が居住可能な地域である。
- ③ 農業の起源地の自然地理学的条件としては、丘陵および山地地域が最適である。
- ④ 農業は最初森林地域より開かれた。
- ⑤ 農業の開始者は、森林に居住する人々の集団であった。
- ⑥ 農業を最初に始めた人々は、定住生活者であった。

すなわち、上述の項目の①の条件に関しては、植物の改良は、人類のためにより役立つように人為淘汰される必要があるが、それを実行できるのは、飢饉におびえるような生活をしている集団では不可能であるとみなしたのである。②の条件で示したように、多種多様の動植物が存在している地域は、各種の実験を実施するのに材料が豊富で

第1図 Sauer, C. O. の農業の起源



凡例

-  起源地
-  優勢な農業の形態での拡大
-  種子農業中になお認められる早期の拡大
-  作物栽培は伝わらずに他の文化要素のみ伝播した経路

〔出所〕 Sauer, C. O. (1952) : "Agricultural origins and despersals"
Amer. Geogr. Soc. New York

竹内常行・斎藤晃吉訳 (1960) 『農業の起源』古今書院 付図を一部省略して改図

あることなどから、好都合である。さらに、これらの地域は、地形・地質・気候条件などにおいても、多様性をもつことが要求される。その最適の場所が、③の条件で示された丘陵および山地地域であると推定したのである。というのは、一般に4大文明発祥地などと称されている、大河川の流域を主体とした平坦地において、農耕の初期の段階では、長期間にわたり洪水に見舞われるため、

堤防・排水・灌漑などの諸設備が必要とされるが、それらを構築する土木技術が充分でなかったため、当時では農業の開始は困難であろうと類推するのである。④の条件については、初期の農耕民は、この点も技術上の理由からなのであるが、草原などの芝土を掘り起こしたり、生長の旺盛な匍根のある草を根絶することは不可能であった。しかし、森林地帯であれば、火を放ち、そのことによって

樹木を枯死させ、栽培の場所を確保することができた。そして、彼らの居住地は、⑤の条件で示されたように、栽培地に近い森林帯が選ばれた。なお、森林帯には、弓矢などの武器で動物などを捕獲する狩猟民が居住しているが、彼らの主要道具は、弓矢の先に使用したり、捕獲した動物の皮・肉を削ぐ石製の薄片あるいは刃が中心であった。それ故、耕地を掘り起こしたりする作業には、これらの道具は役立たなかった。かかる理由から、狩猟民が農耕に従事する可能性は非常に少なく、初期の農耕民は狩猟民とは異なった森林居住民で、耕作するのに適した斧の使用であったと推定している。さらに、農業は作物の栽培が主作業なのであるが、⑥の条件で示されているように、栽培地の周辺に定住することがもっとも望ましい住居形態となる。すなわち、農業では、収穫期までの長期間継続的に農作物を世話する必要があるからである。この点からも、獲物を求めて森林帯を移動する狩猟民とはあい入れない性格のものといえる。

以上のような農業の起源に関する基礎的な前提条件を十分に満足する地域を、Sauer, C.O. は、農業の発祥地と想定したのである。そして、かかる地域として、旧世界の場合、照葉樹林地帯の中心部とほぼ重複する東南アジアを主張することになる（第1図）¹⁷⁾。

かかる理由として、Sauer, C.O. は、例えばモンスーンや、漁業の操業が可能な水域の存在などに代表される、農業の起源の基礎的必須条件である自然環境および生物環境の実在をあげている。さらに、東南アジアは、水上あるいは陸上の交通的位置からいっても、旧世界のほぼ中心部に該当しているという利点も見逃せない。なお、その他の優位性としては、漁業農業文化（fishing-farming culture）の興隆のためにすぐれた条件を具備していると、Sauer, C.O. は主張する。¹⁸⁾ つまり、東南アジアが農業の発祥地とみなされる主要因は、漁業の発展を含む上述の必須条件を備えている他に、家畜的動物の発生¹⁹⁾、栄養繁殖（vegetative reproduction）に基づく栽培技術、²⁰⁾ および植物の改良の中心地であることによっている。

次に、これらの発祥地から照葉樹林地帯に所属している華南、日本列島西部への伝播を考えてみよう。Sauer, C.O. は、稲、竹、バナナ、タロイモ、

ヤムイモ、柿などは、起源地である東南アジアから非常に古い時代に伝播されたものであると推定する。その伝播コースとしては、第1図にみられるように、長江を横断し、台湾経由南九州に至ったと考えられる。なお、豚・ニワトリなどの家畜動物の場合、日本列島をさらに北進し、より北方に伝播していったとみなしている。

以上のSauer, C.O. の東南アジア農業起源論でとくに注目される他の点としては、まず第1図に図示されているように、農業の発祥地と想定されている東南アジアから、マレー半島経由、ジャワ島・スマトラ島を通して、ボルネオ島・フィリピン諸島にまで延びる南方ルートが存在である。かかるコースに関しては、照葉樹林文化論との関連では、後章で論じる照葉樹林文化の「南方展開型」とほぼ類似しており、注目に値する。第2点としては、発祥地から、インド半島中北部を横断して、アラビア海にそって西進する西方ルートの存在である。このコースの最終地点は、中尾佐助の提唱するサバナ農耕文化の発祥地とほぼ等しい。しかし、中尾説では、Sauer, C.O. の想定する西方ルートとは逆に、サバナ農耕文化の発祥地の方から東方に向かって、Sauer, C.O. のいう東南アジアの方に伝播コースが強調されている。このように、両者はまったく方向が逆の伝播コースを想定しているのであるが、かかる点に関しては、アフリカ大陸に農耕の起源地の存在を認めるか否かの問題とも深く関連し、Sauer, C.O. と中尾佐助の対立は非常に興味深い。²¹⁾

2) 岡正雄の「日本文化の基礎構造」

現在、日本文化は、雑種文化であるとか混合文化であるとかいわれ、種々の立場から議論されている。これらの立場に共通する認識は、極東の離島に位置する日本列島には、アジア大陸を筆頭に周辺諸地域から伝播してきた各種の文化が重層し、累積しあって日本固有の文化を形成したとみる観点である。すなわち、重層し、累積しあった文化層²²⁾ がわが国の基層文化の基底となっているとみなすのである。

かかる見解をもつ代表的な研究者が岡正雄である。岡は、その論文の冒頭において、次のように論じている。すなわち、「日本文化は、いわゆる固有文化を基盤として、これに中国文化、仏教文化、欧米文化が累積し、混交し、あるいは同居併

存して形成された、1つの混合、累積的構造の文化であること、またさらに、固有文化といわれるものが、すでにいくつかの異質・異系の種族的文化から成立した多元的文化構造としてとらえられるであろう。」²³⁾と指摘したのである。それでは、どのような種族文化から、日本の固有文化が形成されたのであろうか。その点を解明する手段として、まず民俗といわれる生活文化、古典として残っている伝承や記録を分析することで、いくつかの生活文化の複合というものを探し求める。そして、かかる作業後、いくつかの類型を定立したり、再構成したりする。一方それと同時に、比較民族学的な知識・情報を手がかりとして、日本文化を分析し、現在では一見したところ相互関連が認められない種々の文化要素を複合することで、類型を発見し、再構成を試みることを行なう。²⁴⁾

とはいうものの、日本文化を構成したと考えられる種族文化複合は、日本周辺に居住する諸種族・民族との長期間にわたる接触・混合のプロセスにおいて、各々の種族あるいは民族としての文化的統一性が解体し、それらの文化要素の若干は、衰退・変貌などを遂げてしまい、すでに本来の姿を消失してしまっている。したがって、現段階とすれば、種族文化にとって重要な要素であると考えられる文化要素が少しでも存在すれば、それらにある種族文化のかつての存在を語るメルクマールとして重視しようとする立場をとる。²⁵⁾

以上論じたような作業プロセス——つまり民俗学＝民族学的方法と、先史学的方法を併用すること——を経て、以下に示すような5段階の種族文化複合²⁶⁾が確認できると主張する。なお、かかる仮説は、日本における古い文化層の重層・累積関係を種族文化複合という形で捉えた壮大な仮説である²⁷⁾、と称されているものである。

- ① 母系的・秘密結社の・芋栽培——狩猟民文化
- ② 母系的・陸稲栽培——狩猟民文化
- ③ 父系的・「ハラ」氏族的・畑作——狩猟・飼畜民文化
- ④ 男性的・年齢階梯制的・水稲栽培——漁撈民文化
- ⑤ 父権的・「ウジ」氏族的・支配者文化

このように、岡正雄は、5段階の種族文化複合を摘出したのである。しかし、これらは、各々の種族文化複合に関するもっとも特色ある文化要素の羅列とも考えられるので、筆者なりに、これらを構成する各要素を項目ごとに分類しなおすと、第1表のように整理できる。以下では、この第1表に準拠しつつ、5段階の種族文化複合の特色を検討していこう。²⁸⁾

①の種族文化複合でもっとも注目されるのは、タロイモ、ヤムイモなどのイモ類を栽培する低農耕が、縄文時代中期以降と想定される時代にすでに実在していたとみなす点である。岡は、かよう

第1表 岡正雄による日本文化の基礎構造

項目 \ 段階	①	②	③	④	⑤
出自など	母系的	母系的	父系的	男性的	父系的
生業形態	イモ栽培・狩猟	陸稲栽培・狩猟	畑作・狩猟・飼畜	水稲栽培・漁撈	騎馬遊牧
起源地	メラネシア	南中国、東南アジアの山地・丘陵	中国東北 朝鮮半島	中国江南	中央アジア
種族	メラネシア人	オーストロアジア系	ツングース系	オーストロアジア系	アルタイ系
社会組織(集団)	秘密結社	家族的・村落共同体的シャーマニズム	「ハラ」氏族	年齢階梯制	「ウジ」氏族
日本への伝来(時代)	縄文時代中期	縄文時代末期	弥生時代初期	弥生時代(BC. 4～5世紀)	4世紀前半
伝播コース	南方	南方	北方	南方	北方

〔出所〕岡正雄（1979）『異人その他 日本＝文化の源流と日本国家の形成』言叢社 pp18～36. より作成

な主張の根拠として、東南アジアからオセニアにかけて、イモ栽培は稲の栽培に先行しているという一般的結果と、タロイモの1種であるサトイモがわが国の宗教行事・年中行事などにおいて必須かつ重要視されている事実は、農耕儀礼が古い重要な栽培作物に付随し、新しく導入されたものには伴わないという傾向と合致していることなどをあげている。また、ここでいう秘密結社（Secret Society）とは、異様な仮面仮装者たちが、祖先・祖霊として集落などに出現するものである。この種のものと同様の仮面仮装複合は、沖縄県の新年祭り・盆祭り・ワラビ祭り・海神祭りなどにみられるものと本質的には一致していると指摘している。このように、わが国の地方に残存している習慣・風俗などには合致点が認められる。しかしながら、現実には、起源地であるメラネシアからメラネシア人が直接に渡来したとは考えにくく、まずアジア大陸の海岸部に拠点²⁹⁾をつくり、そこから誕生するルートの1つとして、日本列島に流入したと推定している。

②の種族文化複合では、農業の起源に関する通説を否定することから論を展開した。すなわち「一般的にいうと、農耕文化が大河川の流域に発生したという従来の説は修正されなければならない、河川の氾濫を統制・管理する技術と組織の発達なくしては、河川の流域の沖積地に定住し農耕に従事することは不可能で、むしろ農耕文化は南アジアの谷川、河川からあまり遠くない山地丘陵の斜面の焼畑耕作に発すると考えるのが自然であろう」³⁰⁾と論じ、農業の起源が低地の水稲栽培地域から開始されたという通説に疑問を呈したのである。かような岡の立論は、前項で論じたSauer, C. O. が唱える農業の起源論とほとんど同内容の見解であり、大変興味を持たれる。そして、とくにわが国の場合、山地の傾斜地において、縄文文化の遺跡や居住跡が数多く出土しているが、その中でも、縄文時代中・末期の遺跡を単純に狩猟民のものであると結論づけるのは疑問であるとする。すなわち、これらの時期の遺跡はむしろ、焼畑耕作民によって形成されたとするのが妥当ではないか、と示唆する。このように、岡は、この種族文化複合によって、焼畑耕作が日本列島に導入され、さらに主として陸稲が栽培されたことを強調するのである。

かような生業形態を特色とする種族文化複合は、例えば、オオゲツヒメやウケモチノカミの屍体化生神話、アマテラス、ツクヨミ、スサノオの3きょうだい神の存在、および末弟であるスサノオの暴行によって惹起する日蝕神話³¹⁾などに代表されるわが国と同型の神話が、南中国から東南アジア山地に居住する少数民族、例えばミャオ族地帯などに分布していることを指摘し、(2)段階の種族文化複合の伝播コースが南方からもたらされたものであるという有力な論拠の1つと考えている。なおその他には、第1表以外、太陽女神アマテラスの崇拜、司祭女神の存在などもかかる種族文化複合の要素としてあげている。

③の種族文化複合は、これまでの(1)・(2)が南方から伝播されたのに対して、北方から日本列島に流入してきた種族文化複合である。岡正雄は、この種族文化複合を1つの独立した種族文化複合として再構成するのは困難であるとしながらも、弥生時代初期に、中国東北方、朝鮮半島を経由して、ツングース系に属する、ある種族が伝来してきたのではないかと推定する。生業形態としては、アワ、キビなどの雑穀を焼畑で栽培する一方、狩猟あるいは飼畜などにも従事していたとしている。また、この種族文化複合は、伝播先の朝鮮半島南部や日本列島西部において、急速に稲作の栽培技術を受容したものとみなしている。さらに、アルタイ語系の言語を最初に日本列島に将来したのも、この種族であると推察する。その証拠として、わが国において、ウカラ・ヤカラ・ハラカラなどのハラあるいはカラという語は、ツングース語を話す種族間においては、外婚的父系同族集団をハラ(Xala)と称していることに由来し、そのことは父系的系譜意識の強さを示しているとする。なお、この種族文化複合にみられる宗教的特色としては、カミが天上から、山上、樹梢、柱などに降臨するという天神信仰や、北方アジア的なシャーマニズムなどの存在があげられる。

④段階の種族文化複合は、弥生文化を構成する重要な種族文化複合で、弥生時代のわが国にみられる南方的要素の大部分をもたらしたと推定する。その特色は、技術的に進歩した水稲栽培を行なうとともに、沿岸漁撈にも従事している点である。かかる点は、前項で述べたSauer, C. O. が提唱した旧世界における農業の起源地としての東南アジ

アの場合と非常に類似しており、大変興味深い指摘といえる。社会組織としては、主として現在の関東地方から西南日本までの漁村を主体に顕著にみられる年齢階梯制が、この種族文化複合では固有の形態とみなされている。そして、この年齢階梯制に代表される社会は、「すぐれて、男性的な社会であった。親族組織としては、父系的ではあるが、母・妻方の姻戚の地位が高く、多少の双系的傾向さえも示し、社会構造における構成原理ないし上下秩序原理として、年齢・世代区分原理が支配的である。村内婚が一般的で、村内における家格の上下意識はあまり強くない。」³²⁾という特徴を有していた。さらに、わが国における稲米にまつわる宗教観念や儀礼の大部分も、この種族文化複合によって、日本列島に伝播されたものであった。つまり、以上のような種々の特色をもつ種族文化複合は、すべてオーストロアジア系の文化複合に由来するものとみなすのである。

さらに、岡正雄は、この種族文化複合が、中国の江南地方から紀元前4・5世紀頃日本列島に流入したのではないかと時代を特定している。そして、かような理由として、当時は江南地方を支配していた呉・越両国が漢民族の南下に伴って滅亡するという時期に相当するので、その動揺・混乱の影響を受けた結果であろうと推定している。すなわち、このような中国大陆における動揺・混乱が、いわば玉突き状態のように、日本を含む周辺地域に波及し、それが、日本列島では、弥生式文化の南方的要素となってその後の日本の基層文化の形成に大きな影響を与えていると考えるのである。しかしながら、かかる点に関しては、岡学説が発表された時代の考古学的水準からいえば、あるいは無理難題をふっかけることになるかもしれないが、紀元前4・5世紀が弥生時代の文化を構成する重要な時期であろうか。つまり現段階では、紀元4・5世紀といえば、縄文時代末期（晩期）に比定するのが一般的である。それ故、この種族文化複合を典型的な弥生時代の文化複合とみるのは、再考する必要があるように感じられる。そのような意味から、むしろ②と④の種族文化複合は、起源地および種族がほぼ等しいことなどから、時系列的に連続しているとみなした方が、より妥当性をもつものではないかと推察できる。

⑤の種族文化複合は、③と同様、北方から日本

列島に伝来したものである。この種族文化複合の核心は、「日本列島に支配者王侯文化と国家的支配体制をもちこんだ天皇氏族を中心とする種族の文化である。」³³⁾という論旨からも明確のように、これまでの段階においては、日本列島に流入した種族文化複合が特定できなかったのに対して、はじめて天皇一族と明らかに断定したことである。また、この種族文化複合は、例えば、氏族ないし種族が5つに区画される五組織、王朝制、鍛冶職集団に代表される職業集団などの独特の社会構造、父系的祖先崇拜、職業的なシャーマニズムなどを主体とする宗教形態によって特徴づけられるとする。そして、これらの種族文化複合は、あらゆる点において、本質的には騎馬遊牧民族³⁴⁾の文化的性格と一致すると述べている。しかし、この種族は、本質的には上述したように、騎馬遊牧民的な支配者的・王朝的・軍隊的な性格を顕著にもっているが、日本列島に流入した当時はこれらの本質的な特色はうすれていたと考えられる。なお、同様の種族的構造を有する国家としては、朝鮮半島に形成された扶余・高麗などの諸国があげられている。

このように、5段階に想定される種族文化複合が、わが国の文化の基礎構造の構成に間接あるいは直接に何らかの形式で参加したとみるわけである。つまり具体的にいえば、日本固有の基層文化は、南中国、江南地方、インドネシア方面などの南方から渡来した、数派にわたる農耕文化によって培われた基盤の上に、北方から騎馬遊牧民族的な性格をもつ支配者文化が被覆して形成された、一種の混合文化であるとみなしてよいと考えられる。

以上のように論を展開する岡正雄の学説の最大の特徴は、まず理論的なフレームワークを設定し、これを手がかりとして、日本を中心に周辺地域を含む地域間の年代的な上・下関係を発見することに主眼を置く。そして、そのような理論的作業を終了した後、わが国の種族文化複合の重層関係を求めるというものであろうと推察できる。

しかしながら、このように壮大な論理的展開を示す岡学説は、かなり多くの仮説の上に成立している点も事実である。この点に関して、多くの研究者が種々の立場³⁵⁾より論じているが、本稿の主題である照葉樹林文化論との関連では、佐々木高

明の発言³⁶⁾が目立つ。佐々木高明は、岡正雄の立場を大筋においては承認したうえで、岡の提唱する①・②段階の種族文化が、本当に女系的社会であったか否か。また(1)の種族文化複合が、縄文時代中期にイモ栽培を実施していたかどうか。この点に関しては、次の②段階の種族文化複合期に、陸稲が実際に日本列島に導入され栽培されたかなどの問題との関連とともに、大いに疑問を抱いている。しかし、このような問題点は残るものの、岡正雄の主張する①・②および④の種族文化複合は、照葉樹林文化論すなわち日本の基層文化における南方要素³⁷⁾の解明には、少なからぬ影響を与えているといえよう。

3. 照葉樹林文化論の萌芽と展開

1) 萌芽

① 照葉樹林帯

前項で述べたような背景で、照葉樹林文化論が形成されることになったわけである。最初に、照葉樹林文化論を論ずる前に、照葉樹林文化論の前提とでも称すべき「照葉樹林帯」という生態学的概念が、どのように設定されたかを検討していこう。

照葉樹林帯という生態学的用語を学問的にはじめて提唱したのは吉良龍夫である。³⁸⁾吉良は、学生時代から中国東北地方北西部に位置する、大興安嶺探検など、主として東アジア各地の探検やフィールドサーヴェイを実施してきた。そして、そこから得られた豊富な現地体験を基盤にして、かかる概念を形成したのであった。³⁹⁾しかしながら、吉良にとっては、照葉樹林帯というある特定地域に現れる気候区を設定することが最終目的ではなく、新しい基準によって世界の気候区を設定することを目標とした。⁴⁰⁾すなわち、吉良龍夫は、顕名なドイツの気候学者 Köppen, W. が考案した、植物分布を主体とする世界の気候区分⁴¹⁾を評価する。しかし、Köppen, W. は、ヨーロッパ人の眼で植生 (vegetation) を観察しているため、彼が考案した気候システムでは、熱帯や東南アジアにおいて実際の植生分布と一致していないという現象が多くみられた。とくに大興安嶺を探検していると、これまで知らなかったタイプの植生型が出現して、Köppen, W. の気候区分では判定できないと実感した。そこで、同じく学生隊員として探検隊に参

加していた川喜田二郎などと共に、世界の気候区を作成することにしたのであった。

Köppen, W. の気候区分の基本は、温度と乾湿度の2要素から気候区を決定しようとするものであった。しかしながら、温度に関するこれらの数値は、生物とは関係なしに物理的に測定された数値であったため、生物が感じているような形式で数値が出せないという欠点を有していた。Köppen, W. は、例えば、熱帯などの暑い地方に生育する植物が寒冷地方への分布を制限されているのは、冬季の寒さによるものとみなした。一方、寒冷地方に生育する植物は、寒さに対しては十分に適応能力が備わっているため、その分布を制限されるのは、夏季の暑さによると考えた。そこで、北半球では、熱帯の北限は冬季の寒さによって決定することにした。しかし、針葉樹林帯の南限に関しては、夏季の最高温度によって決定するなど、各々の地域・地域での最適の温度条件を探し、それによって温度帯を区分するという方針をとった。それ故、全体としての基準システムがなくなるという欠点がみられた。かような理由から、その点を改良したのが川喜田二郎であった。川喜田は、地域ごとに異なる基準で温度区分するという従来の方法を排除して、温帯以北では植生分布が一致し、かつ各温度帯の農業生産力に比例する積算温度⁴²⁾に注目した。このように修正された川喜田の作成になる、温度に対するシステムを、吉良は次のように利用した。つまり、照葉樹林の分布が夏季の積算温度ではなく冬季の寒さに決定されることから、日本の照葉樹林帯と落葉樹林帯との境界を確定する場合、冬季の寒さと夏季の暑さを分離して処理するという、上述の川喜田のシステムを採用したのである。

一方、乾湿度に関しては、Köppen, W. などに代表される一般の基準としては、蒸発量が支出で、降雨量が収入であるので、両者の比をとって示す方法が使われていた。すなわち、具体的には、蒸発の大小は、約90パーセントまでが温度によって決定されるので、温度と降水量の比を採用することで決定された。ところが、かかる乾湿度のインデックスをとると、例えば同年度に1,000ミリの降雨がある地方でも、主として暑い夏季に雨が集中するより、冬季に集中する場合の方が蒸発量が少なくてすむので、両地方では異なる気候景観が

90° (N) ← 乾燥 → 湿度 →

氷 雪

ツンドラ

落葉針葉樹林

常緑針葉樹林

砂

ステップ

サバンナ

暖帯落葉樹林

照葉樹林(夏雨)

硬葉樹林(冬雨)

亜熱帯雨緑林

亜熱帯多雨林

とげ低木林

熱帯雨緑林

熱帯多雨林

暖かさの指数

極帯 寒帯

亜感帯

冷温帯

暖温帯

亜熱帯

熱帯

過乾燥 乾燥 半乾燥 準湿润 湿润

(乾湿度気候帯)

p.63の原図を一部修正し作成。

での落葉広葉樹林帯⁴⁴⁾が冷温帯、関東以南が照葉樹林帯で暖温帯、そして、トカラ列島以南が亜熱帯に所属することになる。つまり、本州島だけみれば、落葉広葉樹林帯と照葉樹林帯に2分することが可能になるのである。

主として吉良龍夫の設定した照葉樹林帯に、独自の農耕文化の存在を認め、それを「照葉樹林文化」と唱えたのは中尾佐助である。中尾も、当初吉良と同様に照葉樹林文化のみを設定したのでは

なかった。すなわち中尾は、前述したSauer, C. O.などの外国の研究者に学問的刺激を受けて、世界の農耕の発祥地を論究する作業を開始した。そして、その作業を通じて、わが国の基層文化に多大の影響を与えたものと想定できる、照葉樹林文化という概念を提唱したのであった。それでは、どのようにして、中尾は照葉樹林文化という概念を創造することが可能だったのであろうか。かかるプロセスを詳細に分析することで、照葉樹林文化の特質を追求していくことにする。

中尾佐助は、農業が人類の文化財として野生種から栽培種へと育てあげ、改良してきたことから、文化の基礎的な要素となってきたと主張する。すなわち「文化の出発点が耕すことであるという認識は、西欧の学界が数百年にわたり、世界各地の未開社会に接触し調査した結果、あるいは考古学的研究、あるいは書斎における思索などを総合した結論である。人類の文化が、農耕段階にはいるとともに、急激に大発展をおこしてきたことは、

まぎれもない事実である。』⁴⁵⁾と論じる。それ故、この引用文の要旨からも判明するように、農業の起源やその発見を確認するには、農作物の側からのアプローチが最良の方法であると思われる。すなわち、かような立場は、母系制、母権文化などの女性の役割、農地制度などを代表とする社会構造、農耕儀礼を中心とする宗教儀礼などを一応除外して考察しようとするものである。換言すると、「種から胃袋まで」⁴⁶⁾のプロセスを問題の主眼とするというのである。一般には、全体性をもった文化のうち、例えば、農業に関係した要素のみを抽出すると、それは農耕文化複合と称されるものになる。この農耕文化複合の中で、上述の種から胃袋までを農耕文化基本複合 (agriculture basic complex) と呼ぶ。その理由は、この種から胃袋までの部分が、農耕文化複合の中で、もっとも基本的な部分を構成するからである。つまり、農耕文化複合には、基本的部分と農地制度や農耕儀礼に代表される二次的な部分が存在し、両者間には相

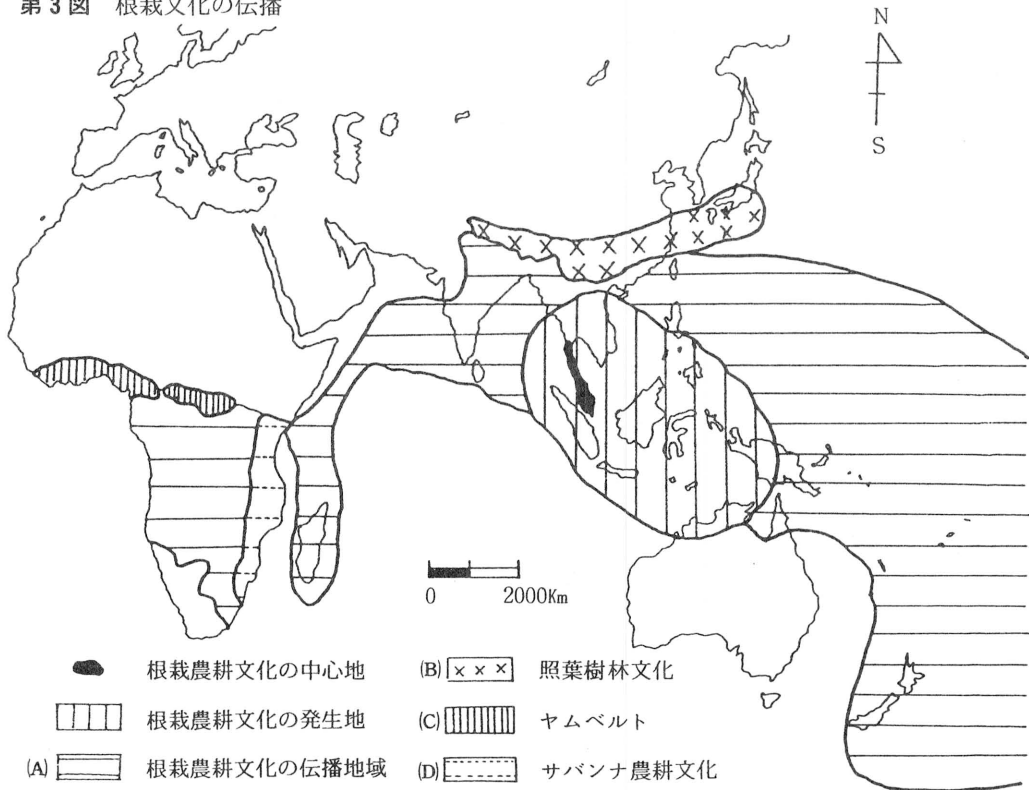
第2表 4つの農耕文化

文化名	ウビ農耕文化 〔根栽農耕文化〕	カリフ農耕文化 〔サバンナ農耕文化〕	ラビ農耕文化 〔地中海農耕文化〕	アメリカ農耕文化
起源地	マレー半島付近	ニゼール川付近	オリエント	カリブ海
分布	オセアニア・マレーシア・インド・中部アフリカ	サハラ・エチオピア・西インド	地中海海域・オリエント・ヨーロッパ	
人種	モンゴロイド	ネグロイド	コーカソイド	
環境	熱帯降雨林	夏雨性サバンナ	冬雨性地中海気候	
作物生態	多年生	カリフ	ラビ	
主要作物	ヤム・タロ・バナナ・サトウキビ	ミレット・イネ・マメ類	ムギ類・エンドウ・ソラマメ	トウモロコシ・カボチャ・ジャガイモ
成立年代	B. C. 15000	B. C. 5000	B. C. 5000	
耕地利用	焼畑・ブッシュ・ファロー	連作園耕	輪作・グラス・ファロー	
播種様式	点播	条播	散播	
農具	掘り棒	クワ〔ホー・マドック〕	スペート・アート	
加工	生食 石やき	タテギネ精白 α -澱粉加工	キルン〔粉食〕	
食料経済	貯蔵輸送困難	余剰貧弱	余剰豊富 貯蔵輸送容易	

〔出所〕 中尾佐助 (1967)『農業起原論』

森下正明・吉良龍夫編『自然 — 生態学的研究 —』中央公論社 p.330 表1より引用。
但し一部修正

第3図 根栽文化の伝播



〔出所〕 中尾佐助 (1966)『栽培植物と農耕の起源』岩波書店 (岩波新書)
p. 57図14を一部修正して改図

当の大きな差異が認められるからである。⁴⁷⁾そして、農業の起源にとって、基本的な部分を占める農耕文化基本複合は、全世界に4系統しか存在しないと断言する。⁴⁸⁾

なお、かかる観点の利点としては、作物の種類そのものが、独立発生かそれとも伝播によってもたらされたものかを明確に区分できることである。すなわち、植物学や遺伝学の研究成果を参照すれば、個々の作物の原種、原産地などは各々特定可能である。したがって、かかる原産地以外の土地に存在する作物は、伝播によって起源地から流入したものとししか考えられない。それ故、伝播コースは、品種が順次変わっていく地理的分布を調査することにより、信頼度の高い結論が得られるとする。⁴⁹⁾

かような論点から区分した4系統とは、第2表に示す如く、4つの農耕文化が該当する。⁵⁰⁾しかしながら、4系統で示される世界の農耕文化の起源は、Murdock, G. P. がアフリカの諸民族の歴史および文化を長期間にわたって考察し、その結

果提出した農業起源説⁵¹⁾とほとんど一致している。この事実は注目されるところであり、中尾説の妥当性を示す傍証ともなろう。以下では、照葉樹林文化論ともっとも深い関係を有するウビ (ubi) 農耕文化論に限定して論を展開していく。

中尾佐助は、東南アジアのマレー半島付近に成立したと想定される、ウビ農耕文化が人類最古の農耕文化であると推定している。かかる点は、既述のSauer, C. O. とほぼ同様である。中尾によれば、マレー半島を中心とする熱帯降雨林の中で、バナナ・ヤムイモ・タロイモ・サトウキビの4つの主要栽培植物を開発したことは、人類の生活上、いわば草分けとでも称すべき成果であったという。つまり、これらの4系統から構成される農業体系は安定した食物生産を保障するものであり、この方式によってはじめて、農業生産に依存する経済の成立が可能となった。かような農耕を主力とする文化は、何よりも澱粉質のイモ類が主要作物なので、一般には根栽 (イモ栽培) 農耕文化と称されている。中尾は、その中でもとくに東南ア

ジアの根栽農耕文化のことをウビ農耕文化と称することを提唱している。⁵²⁾かかる理由は、東南アジアに起源をもつヤムイモは、ハワイ諸島などの南太平洋から、マダガスカル島のある東アフリカまで伝播しているのであるが、マレー人の名称であるウビが広く使用されていることによるものとされる。⁵³⁾つまり、このような事実から、これらの地域ではかなり典型的な根栽農耕文化複合が残存しているとみなされるからである。かようなウビ農耕文化の特色を項目ごとに列挙してみると、

- ① 無種子農業（栄養繁殖）であること。
- ② 倍数体利用の進歩。
- ③ マメ類と油料作物の欠如。
- ④ 掘り棒を唯一の農具とする農業。
- ⑤ キチン・ガーデン（裏庭）から焼畑への移行。

⑥ ハトムギの利用。

⑦ 根栽農耕文化の伝播。

の7項目となる。⁵⁴⁾この項目の中で、とくに注目されるのが⑦の根栽農耕文化の他地域への伝播である（第3図）。中尾は、マレー半島を中心とするウビ農耕文化の中心から、東はポリネシア（第3図A）、西はアフリカ中部（第3図C）、インド亜大陸からマダガスカル島（第3図D）および北は照葉樹林帯（第3図B）を想定している。⁵⁵⁾この内、北部の照葉樹林帯に伝播したウビ農耕文化は、照葉樹林帯が前項で論じた如く温帯に所属しているので、例えばバナナなどは気候条件から栽培できなくなり、照葉樹林文化と称される別の農耕文化複合が新たに成立することになったのである。（未完）

註および参考文献

- 1) von Richthofen, F.F. (1833) "Aufgaben und Methoden der heutigen Geographie. Akademische Antrittsrede, gehalten in der Aula der Universität Leipzig am 27. April" Verlag von Veit & Comp. なお本書は、国松久弥編（1976）『リヒトホーフエン 地理学の課題と方法』古今書院、において全訳されている。同編書p. 2による。
- 2) 田畑久夫（1990）「照葉樹林文化論と雲貴高原東部の少数民族の生業形態」兵庫地理35 pp. 43-58. この拙論の前半部では、照葉樹林文化論の現段階の問題点を中心に検討した。本稿はその続編とでもいうべき性格をもつ。
- 3) 東亜半月弧と称されている。
- 4) 照葉樹林帯の中心部近くに位置する雲貴高原に関して、筆者は、次のような著書・論考を発表している。
田畑久夫・金丸良子（1989）『中・雲貴高原の少数民族——ミャオ族・トン族——』白帝社
田畑久夫（1987）『雲貴高原のフィールドノートから——侗族の社会・経済調査①～③——』地理32-1, pp. 86-96. 32-2, pp. 78-88. 32-3, pp. 56-66.
田畑久夫・金丸良子（1990 A）「雲貴高原東部のヤオ族——今則・大塲を訪ねて——（正）・（続）」地理35-1, pp. 130-137. 35-2, pp. 90-96.
田畑久夫・金丸良子（1990 B）『中国貴州省・荔波県のヤオ族——洞子を訪ねて——（正）・（続）」地理35-8 pp. 101-108. 35-10 pp. 118-126. 田畑

久夫（印刷中）「鳥居龍藏と西南中国の少数民族——ミャオ族調査を中心に——」日本文化史研究14。

- 5) 本稿では、農耕とは、農業のより原初的（primitive）形態を示すものとする。
- 6) Murdock, G.P. (1959) "Africa. Its people and their culture history" McGraw-Hill New York.
- 7) Sauer, C.O. (1952) "Agricultural origins and dispersals" Amer. Geogr. Soc. New York. 竹内常行・斉藤晃吉訳（1960）『農業の起源』古今書院
- 8) 岡正雄の立場は、次の論文などにみられる。岡正雄（1958）『日本文化の基礎構造』、『日本民族大系 2』平凡社。岡正雄（1979）『異人その他 日本＝文化の源流と日本国家の形成』言叢社 pp. 18-36 に再録。なお、岡正雄の学説に関しては、以下のシンポジウムで議論されている。伊藤・岩田・大野・大林・岡分・白鳥・村武・山口・蒲生「岡学説と日本民族＝文化の系統起源論の現段階」岡正雄教授古稀記念論文集刊行委員会編（1970）『民族学からみた日本』河出書房新社 pp. 373-434.
- 9) 照葉樹林文化論の提唱者の1人である佐々木高明は、その著書などで度々岡正雄の学説に関して言及している。
例えば、佐々木高明（1971）『稲作以前』日本放送出版協会（NHKブックス）pp. 20-26. など。
- 10) 中尾佐助（1967）「農業起源論」森下正明・吉良竜大編『自然——生態学的研究——』中央公論社 pp. 329-4940 所収。なお、本書より1年前に出

- 版された中尾佐助(1966)『栽培植物と農耕の起源』岩波書店(岩波新書)にも同様の論旨が記述されているが、原稿段階では前書に所収された論文の方が早く完成している点などを考慮して、本稿では、前論文を第1論文とみなした。
- 11) 佐々木高明には、前掲9) 佐々木高明(1971)を筆頭に、照葉樹林文化論に関する著書は非常に多い。その中でも、以下の書物は佐々木の立場を示す好著といえよう。
佐々木高明(1982)『照葉樹林文化の道——ブータン・雲南から日本へ』日本放送出版協会(NHKブックス)
佐々木高明(1986)『縄文文化と日本人——日本基層文化の形成と継承』小学館
佐々木高明(1989)『東・南アジア農耕論——焼畑と稲作——』弘文堂
- 12) 前掲7) 竹内常行・斉藤晃吉訳(1960) p.3
- 13) Sauer, C.O.によれば、農業の起源地の解明は、人類地理学における中心的かつ古典的な問題の一つであると主張する。地理学者は、生物学者とともに、過去においてかかる問題の究明に多く貢献してきたとしている。前掲7) 竹内常行・斉藤晃吉訳(1960) p.30.
- 14) Sauer, C.O.によれば、Davis, W.M.の有名な地形の輪廻説なども、かかる立場であるという。
前掲7) 竹内常行・斉藤晃吉訳(1960) p.3.
- 15) 前掲7) 竹内常行・斉藤晃吉訳(1960) p.3.
- 16) 前掲7) 竹内常行・斉藤晃吉訳(1960) pp.31-34.
- 17) 第1図などから判明するように、Sauer, C.O.が東南アジアと表現している地域は、より厳密に言えば、東南アジアの一部を占めるインドシナ半島北部・アッサム・ガンジス川中流域およびインド東海岸北部を含む地域である。
- 18) 前掲7) 竹内常行・斉藤晃吉訳(1960) p.37.
- 19) 豚・犬・ニワトリ・アヒル・ガチョウなどの家畜化は、この地域で始まったと推定している。
前掲7) 竹内常行・斉藤晃吉訳(1960) pp.31-34.
- 20) Sauer, C.O.は、人類が種子を蒔いて作物を栽培する以前に、植物体の一部分を植え付ける栄養繁殖法を知っていたという前提に立っている。
前提7) 竹内常行・斉藤晃吉訳(1960) p.37.
- 21) Sauer, C.O.は、農業の起源地として、旧世界の場合東南アジア、新世界では新世界の熱帯地帯(中南米)を想定しているが、前者の方が成立が古いとみなしているようである。一方、中尾佐助の場合は、後章で論じるように、4つの農業の起源地を推定している。なお、本稿では、Sauer, C.O.説と中尾佐助説の相違を指摘するに留め、これら両説の評価に
関しては、他日、稿を改めて論じる予定である。
- 22) 本稿では、日本の周辺地域からある時代に、日本に伝播してきた文化の波のことを文化層と呼ぶ。
- 23) 前掲8) 岡正雄(1979) p.18.なお、このような岡の立場の初出は、1933年に留学先のWien大学に提出した学位論文“Kulturschichten in Alt-Japan, 5 Bd”(未刊行)によるものとされるが、一般には、石田英一郎・江上波夫・八幡一郎との座談会の記録である「日本民族=文化の源流と日本国家の形成」民族学研究 13-3 1949ではじめて公表された。なお後者は多くの補足訂正を加えられて、石田英一郎・江上波夫・岡正雄・八幡一郎(1958)『日本民族の起源——対談と討論——』平凡社として出版されている。
- 24) 前掲8) 岡正雄(1958) pp.18-19.
- 25) 前掲8) 岡正雄(1958) p.19.
- 26) 前掲8) 岡正雄(1958) pp.20-31.
- 27) 前掲9) p.20.
- 28) 検討に際しては、以下の岡正雄の学説に関するシンポジウムの討論も参考にした。
前掲8) 岡正雄教授古稀記念論文集刊行委員会編(1970) pp.373-434.
- 29) 岡正雄は、具体的な地点を特定していないが、海流の影響などから華南〜インドシナ半島東部の海岸が考えられる。
- 30) 前掲8) 岡正雄(1958) p.24.
- 31) いわゆる天ノ岩戸神話がこれに該当する。
- 32) 前掲8) 岡正雄(1958) pp.26-27.
- 33) 前掲8) 岡正雄(1958) p.29.
- 34) かかる立場は、後に江上波夫の提唱する、いわゆる「騎馬民族征服王朝説」に深化されていく。江上波夫(1976)『騎馬民族国家』中央公論社(中公新書)など。
- 35) 例えば、前掲8) 岡正雄教授古稀記念論文集刊行委員会編(1970) pp.373-434.においてみられる各研究者の発言など。
- 36) 前掲9) pp.24-26.
- 37) このような立場を最初に導入した研究者は、鳥居龍藏であると思われる。この点に関しては、以下の拙論を参照。
前掲4) 田畑久夫(印神中)
- 38) 照葉樹林という述語は、本来、Laurisilvae あるいは Lorbeerwälder の訳語で、1930年頃中野治房が原語から翻訳したものである。
上山春平編(1969)『照葉樹林文化論』中央公論社(中公新書) pp.66-67.
- 39) 吉良龍夫が照葉樹林帯の概念を設定したのは、1992年に実施された北部大興安嶺探検に学生隊員として参加したときの体験が大きな影響を与えていると

- いう。なお吉良によれば、照葉樹林帯のオリジナリティーは、川喜田二郎によるとしている。前掲38) pp.49-50.
- 大興安嶺探検に関しては、以下の報告書が出版されている。
- 今西錦司 (1952)『大興安嶺探検』毎日新聞社、同復刻 (1975) 講談社
- 40) 前掲38) pp.44-83.
- なお吉良龍夫には、照葉樹林帯に関しては以下の著書・報告書などが代表的である。
- 吉良龍夫 (1949)『日本の森林帯』日本林業技術協会
- 吉良龍夫 (1945 A)「農業地理学の基礎としての東亜の気候区分」京都大学農学部園芸学研究室
- 吉良龍夫 (1945 B)「東亜南方圏の新気候区分」京都大学農学部園芸研究室
- 吉良龍夫 (1948)「温量指数による垂直的な気候帯のわかちかたについて」寒地農学2-2 pp.143-173. など。
- 41) Köppen, W. の気候区分は、次の著書・論文が代表的である。
- Köppen, W. (1930): "Grundriss der Klimakunde" Berlin
- Köppen, W. (1936): "Das geographische System der Klimate" Berlin
- Köppen, W. (1918): "Klassifikation der klimate nach Temperatar, Niederschlag und Jahreslauf Peterm. Mitt. 64. S 193 - 203, S 243 - 248. など。
- なお、Köppen, W. の気候区分は、以下の書物をはじめ、多くの概説書で紹介されている。
- 福井英一郎編 (1962)『現代地理学体系 第1部 気候学 (自然地理・応用地理第2巻)』古今書院 pp. 200-203.
- 42) 一定期間のあいだの、温度変化曲線の積分値をいう。例えば、毎日の平均気温を順次加えてゆけば、日単位の積算温度が計算できる。この積算温度指数を温度気候帯の区分に使用した場合、「温量指数」または「暖かさの指数」とよぶ。
- なお、川喜田二郎のかかる方面での論文としては以下のものなどがあげられる。
- 川喜田二郎 (1949)「カロリー計算による土地生産力の量的表現 - 主として日本列島の場合 - 社会地理19 pp.1-10.
- 川喜田二郎 (1950)「農業・林業の北限および馴鹿飼養の南限などに画する気候的境界について」自然と文化1 pp.39-69.
- 43) 川喜田二郎・吉良龍夫が使用している乾湿指数は次のとおりである。
- $$P / (W + 20) \quad (W \leq 100 \text{ のとき}) \quad P / (W + 140) \quad (W \geq 100 \text{ のとき}).$$
但し P は年間総降雨量 (mm)、W は暖かさの指数。乾湿指数が10以上は多雨林、10-7 は森林、7-5 はサバナ、5-3 はステップ、3 以下は砂漠とする。前掲38) p.55.
- 44) 次の著作に代表されるようにブナ帯とも称せられる場合もあるが、東アジアの大陸部 (すなわち照葉樹林がみられる地域) では、東日本を唯一の例外としてブナ帯がほとんど分布せず、ナラ林が卓越している、という佐々木高明の指摘を受けて、本稿では、前掲2) の拙論同様、かかる森林帯をナラ林もしくはナラ林帯とみなす。
- 市川・山本・斉藤編 (1984)『日本ブナ帯文化』朝倉書店
- 梅原・市川・四手井他編 (1985)『ブナ帯文化』思索社
- 佐々木高明 (1985)「日本文化の東・西 — 日本文化起源へのアプローチ —」立命館文学 483・484 p.90.
- 45) 前掲10) 中尾佐助 (1966) まえがき p.ii.
- 46) 前掲10) 中尾佐助 (1966) p.12.
- 47) 前掲10) 中尾佐助 (1966) pp.12-13.
- 48) 中尾佐助が、農耕文化複合が4つではなく、4系統であると主張する根拠は、それぞれの内部に分枝した亜系が存在するためである。しかし、亜系は常に地理的に棲み分けており、同一地域内に重複して存在することはないと指摘している。
- 前掲10) 中尾佐助 (1966) p.14.
- 49) 前掲10) 中尾佐助 (1966) p.15.
- 50) 前掲10) 中尾佐助 (1967) pp.330-484.
- 51) Murdock, G. P. は以下の書物において、ニジェール川上流、近東、東アジア、新大陸 (アメリカ大陸) に農業が独立発生したとみなしている。前掲6)
- 52) 中尾によれば、アメリカにおいても、東南アジアに発生した根栽文化と性格的にきわめて類似した栽培文化が独自に存在するとみなしている。
- 53) 前掲10) 中尾佐助 (1966) p.35.
- 54) 前掲10) 中尾佐助 (1966) pp.52-58.
- 55) 本稿では詳細に論じる余裕はなかったが、中尾説では、アフリカのニジェール川上流付近に起源をもつ農耕文化が存在し、そこから、ササゲ・シコクビエ・ヒョウタンなどの作物がウビ農耕文化に流入してきたと推定している。そこで、本稿の前半では、中尾説のサバナ農耕説を強調するあまり、ウビ農耕文化から西アフリカへの伝播コース (第3図C) にあえてふれなかった。ヤムベルトは、Sauer, C.O. の想定する東南アジアから西方に伸びる伝播ルートとほぼ一致する。
- (たばたひさお 武庫川女子大学・非)